



元 犬塚

独立の是非を問うた9月18日のスコットランドの住民投票は、複雑な背景をもつ出来事だった。

第一に、スコットランドとイングランドの対立は、福祉国家が新自由主義かという対立と重なっていた。社会保障をめぐるこの訴えは、第二に、自分たちの意見が反映されていないという民主主義の訴えと結びついていた。「あちらのエリート」ではなく「こちららのわれわれ」が主権者であるという主張である。第三には、欧州統合に対する態度の違いも指摘されている。

このような歴史的・政治的背景をふまえて、スコットランドでは、分離独立をめざすナショナルリズムが高揚した。こうした理解はたしかに一面で正しい。

しかし、今回の出来事には、分離独立をめざすナショナルリズムだけでは説明しきれない側面がある。

スコットランド政府が昨年

# スコットランド

## 英国史から見る住民投票

公刊した『スコットランドの未来』というマニフェストには、一見すると分かりにくい主張がいくつもある。独立後もエリザベス2世はわれわれの女王である。通貨はポンドを採用する。こうした主張を見れば、スコットランドが十全な主権をもつ独立国家をめざしたかどうかは判然としなくなる。

独立後も女王をイングランドと共有することについて『スコットランドの未来』は、「1603年に遡る同君連合の継承」と位置づけている。エリザベス1世が後継者を残さず世を去ったこの年、イングランドは、スコットランド王を自分たちの王として受け入れる。王は共有するがあくまで別々の国家、というのが1603年に生まれた両国の関係である。

1603年の政治モデルの継承は、1707年の政治モデルを退けることを意味している。この年、イングランドとスコットランドの議会は統合される。二つの独立国家は、

### 柔軟な区切り 変わらぬ相互依存

イングランドが主導するブリテン連合王国という一つの国家となる。同じ世紀にスコットランドに生まれたデイヴィッド・ヒュームやアダム・スミスの知識人たちは、遅れたスコットランドにはこれが望ましい選択だったと論じた。これに対して今回は、1707年ではなく1603年の関係が望ましいとされた。つまり、関係を保つか切るかでなく、どのような関係かが争われたのである。

内部に複雑な関係を抱えてきた英国史の歩みのなかに位置づけてみると、今回の出来事の意味がより明確になる例は、ほかにもある。

アメリカは英国から最終的には独立したが、当初は分離独立ではなく、本国との関係を新しく再定義することを訴えた。これまでは本国議会が支配する不平等な関係だったが、これからは、同じ王のもとでそれぞれの議会が対等な関係を結ぼうと主張したのである。これは、今回のスコットランドの主張と似ている。

『スコットランドの未来』は同じように、イングランドとの「対等な新しい関係」を提唱している。一見すると分か

りにくいスコットランドの主張は、さまざまな政治的単位を内部に抱えた英国史のなかに位置づけるならば、けっして珍しいものではない。では今回の出来事は、われわれにどんなメッセージを発しているか。

議論されることの多い欧州連合(EU)ばかりでなく、英国という一つの国家の内部だけを見ても、そこには、主権国家という堅い殻を前提とした政治ではなく、柔らかな膜で区切られたさまざまな単位からなる連邦型に近い相互依存の政治がある。この状況は、スコットランドの「独立」が否決されても変わらない。

日本には道州制の議論がある。しかし興味深いことに、スコットランドを東北になぞらえる議論は今回ほとんど皆無だった。明治以後、陸奥(東北)南(関東)が「東北は日本のスコットランドたれ」と語った歴史は、いまでは忘れられているようである。

いぬづか・はじめ 1997年、愛知県生まれ。東北大学教授。専門は政治学(政治学史)。著書に『デイヴィッド・ヒュームの政治学』など。